

論文

山室機恵子の足跡

—山室機恵子と矢島楫子の文書発掘で判明したこと—

安原みどり

Footprint of kieko Yamamuro

— It became clear by the excavation document of Kieko Yamamuro and Kajiko Yajima —

Midori Yasuhara

1. はじめに

日本救世軍の歩みは、そのまま日本の社会福祉の歩みであるといわれる。その「日本救世軍の母」と呼ばれる山室機恵子は、1899（明治32）年に救世軍の山室軍平と結婚し、1916（大正5）年に41歳で亡くなるまでに、8人の子を生み育てながら婦人救済、凶作地子女救護活動、結核療養所設立運動など先駆となる社会事業に尽力した。

しかし機恵子の一次資料は極めて少なく、機恵子の文書は軍平が著した「山室機恵子」の中に講演記録や日記として出てくる程度である。機恵子は明治女学校卒業後、女学雑誌社で事務をし、婦人矯風会でも書記をしていた。機恵子の長男である山室武甫は「女学雑誌にもその筆になる文が載ったろうが、判別しがたい」と述べている¹⁾。

救世軍の機関誌である「ときのこえ」には、機恵子がかいたと思われる文書は随所にあるのだが、機恵子署名記事は「故近衛公爵を悼む」の他に4点しかない²⁾。

筆者は機恵子の一次資料を探してきたが、廓清会の機関誌「廓清」に婦人記者とだけ記載されている文書を9点みつけ、内容を読むうちに機恵子がかいたのではないかと推測した。婦人記者が訪問記を書いた矢島楫子、鳩山春子、後藤男爵夫人の三者に共通するのは、機恵子が結核療養所設立

資金募集の趣意書に発起人を依頼した女性達であることが最大の理由である。

しかし決定的証拠はなかったのだが、婦人矯風会会頭の矢島楫子が「婦人新報」に書いた機恵子の追悼文を発掘した。そこに「機恵子さんから後藤男爵夫人を紹介して欲しいと頼まれた」という記載があり、廓清記事の内容と照合して、機恵子が少なくとも婦人記者の一人であることが証明された。機恵子が「廓清」誌の編集に関係していたことが判明したのだ。

廓清以外の明治、大正期の雑誌からも、機恵子の署名文書を8点発掘した。その内7点までが明治41年から大正元年までに書かれたもので、「廓清」誌に「婦人記者」が執筆した時期と重なった。しかもその時期は、機恵子の主たる活動である婦人救済所主任時代（明治33年～36年）、凶作地子女救護・女学生寄宿舎時代（明治39年）と、結核療養所設立運動時代（大正3年～5年）のまさに狭間であった。救世軍の婦人会や身の上相談のような下支え以外、表立った活動はしておらず、機恵子研究の視点からは空白に近い時期に相当していたのである。そこで機恵子の発掘文書を紐解きながら、廓清会との関わり、矢島楫子との関係、なぜ結核療養所設立運動へ邁進していったのかを考察してみた。

2. 廓清会と山室機恵子

(1) 決死の覚悟で廓清会成立

1911（明治44）年4月に吉原遊郭が全焼し、鍵をかけられ逃げ場を失った多くの娼妓が焼死した。海外からも吉原遊郭廃止を求める外電が届き、国内でも公娼全廃論が高まった。矯風会の矢島会頭は公娼廃止の陳情書を内務大臣に提出し、有志による廃娼演説会、激しい反対運動が起こったが、吉原遊郭は仮営業を許可され本建築にとりかかった³⁾。

そこで廃娼団体の結成が急務となり、江原素六を中心に「廓清会」が発足した。

7月8日の発会式には千数百名の聴衆が集まり、江原素六が趣意を述べ、会長に島田三郎を推薦し、安部磯雄、山室軍平の演説があった。益富政助による経過報告では「廃娼問題は明治23年頃に島田三郎、植村正久、森林太郎、岩本善治、金森通倫その他宣教師諸氏などにより唱えられ廃娼同盟会が組織された。その後、日本基督教婦人矯風会、基督教青年会、救世軍などが尽力してきたが、幾百年続いた悪習を全治することは非常に困難であった。そこで廓清会なるものを起こし、組織的、永続的に奮励努力すべく決定し、5月に創立委員会を開き、島田三郎、矢島楫子、安部磯雄、山室軍平、鈴木文治、益富政助、島貫兵太夫、矢吹幸太郎、山田弥十郎等が会議を重ね発会に至った。月一回機関誌「廓清」を発行、会の経費に関しては矢島楫子、小林富次郎等の助力に負う所大なり」とある⁴⁾。

山室軍平は「廓清会の発会式の時、矢島先生は遊郭側の乱暴人が極度の狼藉を働く恐れがあったので、衣類を着替え講壇に打倒されて死んでも見苦しくないようにと決死の覚悟で立ち会われた」と語っている⁵⁾。楫子は着物の下に白無垢を着て死に備えていた⁶⁾。

1911（明治44）年12月1日の「廓清」に津田梅子談として「公娼制度が人身売買である事はどなたも御承知の筈です。貞操の売買を公許されますのは、風教道徳の上に及ぼす弊害は勿論、外国に対しても誠に恥づかしい次第で、議論の余地は無いと思います。（略）廓清会ができて、矢島先生のようなご老体でさえ、あんなに御熱心でいらっしゃるのですから、私共の様な若い者が、じっとしてはすまないと存じています」と載っている。

婦人矯風会の守屋東は「吉原遊郭が丸焼けになった時であった。矯風会では矢島会頭を先頭に、吉原遊郭再建反対に全力をあげた。島田三郎先生、安部磯雄先生、山室軍平先生、林歌子女史、益富政助氏、伊藤秀吉氏、この方々はいつの演説会にもかかさず並んだ。津田梅子先生が『この運動にジット出来ません』という言葉を使って、非常な協力をされた事など忘れられない。女子英学塾の講堂へ内外人を集めて、人権運動ですと、あの独特な日本語で演説された。山室先生はいつやられるかしれませんよ！と新聞記者に注意された事など、一度や二度ではなかった」と回想している⁷⁾。

(2) 廓清会評議員だった機恵子

廓清会の顧問は大隈重信、会長島田三郎、副会長矢島楫子・安部磯雄で、山室軍平も廓清会発起人兼評議員に名を連ね、ほぼ毎号寄稿している。意外だったのは、山室機恵子も発起人兼評議員に名を連ねていたことである。「廓清」誌の「婦人記者」による文書は表1、役員として機恵子の名が記されているのは表2の通りである。照合すると明らかだが、「婦人記者」による文書は明治44年から大正2年までで、機恵子が廓清会の評議員をしていた時期と重なる。このことから「婦人記者」とは機恵子ではないかという仮定は成り立つのである。「芸娼妓口入所観察記」（第1巻5号）

の前ページには「麻布広尾町なる救世軍婦人ホーム」と説明された写真があり、娼妓達と機恵子が写っているのだ。

「廓清」 「婦人記者」 による文書一覧 (表1)

「芸娼妓口入所観察記」	第1巻5号(明治44年11月)
「売られたる娘」	第1巻6号(明治44年12月)
「恐るべき虚栄心の犠牲」	第2巻1号(明治45年1月)
「矢島先生を訪う」	第3巻1号(大正2年1月)
「嬰兒の育て方」	第3巻6号(大正2年6月)
「夫の心を心とする後藤男夫人」	第3巻7号(大正2年7月)
「嬰兒の精神的育て方」	〃
「嬰兒の育て方」(6号と同題)	第3巻9号(大正2年9月)
「主婦日常の心得」	第3巻12号(大正2年12月)
「母親の心得」(鳩山春子夫人)	第3巻12号(大正2年12月)

「廓清」 評議員の期間 (表2)

発起人・山室機恵子	第1巻2号、明治44年8月1日
評議員・山室機恵子	第1巻3号、明治44年9月1日
〃	第1巻4号、明治44年10月1日
〃	第3巻1号、大正2年2月15日

3. 婦人記者による「廓清」三女史訪問記

婦人記者による訪問記とはどんなものであったか、以下はその概要である。

(1) 「矢島先生を訪う」(大正2年1月)

記者は麹町の女子学院に矢島先生を御尋ね致しました。先生が女子教育のため、又社会矯風のためにお尽し下さいました功績は、実に大なるものであります。今も尚、その意気盛んなこと、私共若い者の実に慚愧に堪えぬ所でございます。先生が八十の高寿に達し給えるを祝して、談話の一二を御紹介申しましょう。

- ◎何時も若い女学生の気持(略)
- ◎嫁も姑も努力せよ(略)
- ◎社会風紀の改良と婦人の自覚

社会風紀の改善には婦人の自覚が最も大切で、婦人矯風会でも初めは同志を募るのさへ苦心しました。お家に伺って、嘸んで含めるように奥様にお話をしてやっと承諾し記名捺印してください。一日に一人か二人の同志を得るのさえ容易ではなかったのですが、宅へ帰るとすぐお使いを寄越して、よくよく考えますと女として差し出がましく思われ連名は取消し願いたいというのです。私は今少し自覚して、婦人自ら起つの覚悟がなくてはと思っておりましたが、この頃では進んでこの事業に尽くされる方が多くなり感謝しています。何事によらず謙遜な心で物事を考え、その判断をあやまらず、起つ可きに立ち、なす可きを為すと言う事は大切で、努めて怠らなければ、何時かはその目的を達する事が出来ると確信しています。

記者は敬愛なる先生の温容に接し、かかる教訓を与えられました。お話ばかりでなく、その高き人格に接して、いい知らぬ感化を与えられたのです。そしてある夫人へご紹介の労を頂きたいとお願い申し上げましたところ、御快諾下さって眼鏡もかけ遊ばさないで、紹介状を認められましたが、それに「友人何々子御紹介」と記されてありました。何と御謙遜な御心で御座いましょう。私ごとき者に対してまで、友人と御記しになった先生の襟度の寛大なのには、実に驚きかつ感嘆せずにはいられませんでした。(傍点、筆者)

婦人記者は矢島楫子に「ある夫人」を紹介して欲しいと頼んだというのである。

(2) 「夫の心を心とせらるる後藤男爵夫人」(大正2年7月)

「麻布の御邸に後藤男爵夫人を御訪ね致しました。いつ行っても気持ちのいいのはお取り次

ぎの丁寧なしかもあっさりした態度です。名家の女中さんや書生さんの中には『何しに来たか』という顔をして見下す方もないではありません。また馬鹿に丁寧で窮屈な所もありますが、男爵邸の書生さんは丁寧であっさりした態度、うかがわずともその家風のゆかしさが忍ばれます。お目にかかって見ると思ったよりお若く、雑誌で拝見したより気品のあるお顔、落ち着いて犯しがたい威厳がほの見え、世の噂の偽りならぬをつくづく感じました。風紀問題や他の事について伺いましたが、夫人は謙譲な態度でこれを辞せられた。『昔からの習慣もあり、欧米の思想も入って来ていますから、殊に風紀の問題などはむつかしい事で、種々な方面から研究なさった方でない、わからないものでございます』。私は夫人のお言葉には実に味わうべき意味が含まれているように思われてなりません。なおも雑談の間にお心がけをうかがい得ました。『話すより聞く事を多くし、自分を新しくする事につとめて居ります』と忘れられぬはこのお言葉。『奥様のご意見をご発表なさっても差し支えない方もございましょうが、私がいちたすのはいかがかと存じます。新聞なり雑誌なりに出た時、夫の意見と違っていたら誠に困るのでございます。主人の心を心としなくてはと心得ます』『主人の流儀も妻がでしゃばるのによろしくないと申します。ですからどなたがおいでになっても、素っ気なくて失礼のようですが、世間一通りのお話よりほか申しあげる事もできませんし、なるべくお目にかからないようにいたして居ります』

夫の心をもって心とせらるるゆかしき夫人！世の模範として仰がれるのも首肯されました。『たしかに男爵夫人は豪い』これが私の心にきざまれた深き印象です』

後藤男爵夫人とは後藤新平の妻、和子のことである。「いつ行っても気持ちのいいのはお取り次ぎの態度」「お目にかかって見ると思ったよりお若く」とあり、婦人記者は何度も訪問したが、後藤男爵夫人と面会できたのは初めてだとわかる。夫人は面会を避けている理由を述べているが、なぜ婦人記者だけが特別に面会できたのかは不明である。

(3) 鳩山春子夫人への聞き書き（「母親の心得」）（大正2年12月）

「鳩山春子夫人がお子さん達を教育なされたについては少なからざる苦心をなされたので御座います。今、春子夫人よりその一端を伺いますれば、『各自独立するまでは酒と煙草を厳禁致しました。親の監督時代に悪癖習慣をつけるのは罪悪であるから、厳禁せねばならぬ事を相談的に申し聞かせ、頭から厳命する事は致しません。子が親の労力によって生活する間は絶対に親に服従せねばならぬが、成人独立しましたら親は子どもの自由を妨げないという事を知らしめました。また人は誰にも厄介にならず、悪影響悪感化を及ばさぬ様に努力することが肝腎で、出来るならば少しでも同胞兄弟を助け、国のため、社会のために尽くすべきであると教えました』と申されました」。

「母親の心得」は「独立心を養う事」「決断心を養う事」「子供を教えるに変化を務める事」の三項目があり、一番目の項目に鳩山夫人の談が載っている。なぜ「鳩山夫人を訪う」と独立して書かなかったのかは不明である。「矢島先生を訪う」と「後藤男爵夫人」はともに2,400字ほどの分量だが、鳩山春子については600字位しかない。これを最後に「婦人記者」は廓清誌から消えるが、反対に鳩山春子はこの先、何度も廓清誌に執筆している。

4. 矢島楫子による「機恵子追悼文」

「婦人新報」第231号（大正5年10月5日発行）に、矢島楫子が「二婦人の伝記を手にして」という文書を掲載していた。タイトルだけでは見落としがちだが、これは矢島楫子自身の筆による機恵子追悼文であった。体調を崩していた楫子は、1916（大正5）年の夏を北海道で過ごして帰京し、30年前に矯風会が組織されて以来願っていた新築の矯風会本部に移ったと最初に書いている。以下は機恵子に関する部分の概要である。

(1) 矢島楫子の「二婦人の伝記を手にして」

□生き残りという感じ

意味深い二婦人の伝記が手に入りました。一つは「山室機恵子」です。機恵子さんはこの七月昇天され、その後早々軍平氏によって書かれたのであります。私から見ればほとんど四十年もお若い方々で、先立たれたかと思うと、ひどく自分の「生き残り」という境界を思わずにはいられません。さりながら神様はなおこの世に私の使命のある事をお示しになっているのだと、静かにその誓旨をかしこみたる次第でありました。

□無言の中に許し合う

機恵子さんとは真に一心同体とも言うべき主義きようだいの姉妹でありながら、一度もゆるゆる対座して話し合った事がなかったのです。基督教のその集まり、ここの会合で一緒になるか、様々の事業の打合せ等で来訪される時に用件を語り合うのみでした。それでいて何となく互いの心は鏡にかけて照らし合う程にわかっていて、何も言うには及ばぬような気が致しておりました。最後の日が近づいた節には、私も病床にいたので、矯風会の代表者が見舞に行かれましたが、ろくろく伝言もせず、葬儀を営まれた日も、私は病床に在って行く事も出来ず、何をも申さ

ないでしまいました。

□精神上の後継者と思いを

ちょうど三年前、機恵子さんが結核療養所設立のため、日夜奔走して居られた頃、ある日、私の許を訪れて、後藤男夫人に紹介状を書いてくれと頼まれました。私は男夫人とは同郷のよしみもある事とて、早速筆を取って書いた紹介状には「このお方は私と姉妹もただならぬ仲であるから、なにぶんよろしく願う」という意味をしたためたところ、その後機恵子さんは男夫人に面会して、非常に便宜を与えられたと喜んで手紙を寄越されました。その手紙はいかにも機恵子さんの面目躍如たるもので、感謝の中にも、己が志を知ってくれるという嬉しさを述べておられました。私はこの手紙こそ保存しておきたいと、保存書類の中に入れて置きましたが見あたらないのは、いかにも残念でなりません。かように無言の中にも許し、許されておった機恵子さんを、私は密かに精神上の後継者と目しておりました。が、その甲斐なく先立たれた事は、非常に残念でなりません。（傍点、筆者）

上記文で「機恵子に頼まれて後藤男夫人に紹介状を書いた」とこと、「機恵子を密かに精神上の後継者と目していた」という矢島楫子の言質は貴重である。

(2) 機恵子は矢島楫子の精神上の後継者

実は機恵子は矢島楫子の紹介で矯風会に入会している。矯風会の機関誌「婦人新報」1896（明治29）年3月1日発行に「矯風会1月入会者 佐藤きゑ子、紹介者 矢島かぢ子」と出ている。佐藤は山室機恵子の旧姓である。1897（明治30）年4月3日発行の「婦人矯風会年会報告」には「矢島会頭のみ責任を負わず、委員一同会頭の手足となりて補助すべしとして特別補助員5名を得た

り。潮田ちせ子、松本萩江子、佐々城豊寿子、渡瀬かめ子、佐藤きゑ子」とある。同年12月20日発行の「婦人新報」で、佐藤きゑ子は東京婦人矯風会書記に選ばれている。1898（明治31）年9月20日には「佐藤きゑ子姉は慈母の病を見舞うため、久しく北海の地に赴かれていたが、昨今帰郷され、矯風会も書記がない不便を感じていたが、以後同姉の尽力により会務を上げられると喜んでい」と出ている。1899（明治32）年6月20日には「佐藤きゑ子姉は本月6日、救世軍将校山室軍平氏とめでたく結婚の式を挙げられた」とあり、翌年10月25日に「会員山室機恵子は先月中、女子分娩された」との消息記事を最後に機恵子の名は見あたらない。矯風会が機恵子に期待していた様子が窺えるが、機恵子は第一子出産後まで矯風会会員だったことになる。

機恵子と軍平の結婚式に参列した久布白落実は「当時、私は女子学院の学生であった。矢島楯子女史が『機恵子さんは一生懸命な人だから、矯風会のようにのろのろした会では間に合わない。山室さんと結婚してよかった』と告げた」と回想している⁸⁾。

山室軍平は百冊以上の著書、全ての著作権を救世軍に捧げたが、驚くほど速筆で、機恵子逝去後わずか二ヶ月で約12万字の「山室機恵子」を出版した。その中に以下の文がある。

「婦人矯風会会頭矢島楯子女史は、彼女（機恵子）の昇天を聞いた時、暫く沈黙の後『嗚呼楽になったんですね』と言われた。彼女が重き責任の荷をおろして、今や安息に入ったということであろう。かくて後、『お機恵さんは山室大佐に救われたのですよ。あの気象で何処で働いても、決して良心の満足が出来ず、苦しんでおった時、救世軍に一身を投じて、今日まで幸

福な生涯を送ったのですからね』と言われたそうである。彼女が私に救われたかどうかは別問題である。しかしながら彼女の衷に強い激しい火の如き精神が宿っており、それがどこへ行っても満足を得なかったのを、救世軍に来て、血と火の宗教に接し、始めて大満足を得たという事だけは間違いがない。矢島女史はさすがに彼女を知るものといわねばならぬ⁹⁾。

上記、山室軍平が引用した楯子のコメントは、大正5年8月の「婦人新報」の「召されたる二女史 故山室大佐夫人」の中にあつた。概要は以下の通りである。

「大佐夫人機恵子女史は7月12日昇天されました。我会に特別ご縁の深い大佐の夫人は、初め矯風会の会員でいらっしゃいました。（略）電話で御昇天の報を（矢島）会頭にお伝え致しました所、久しい沈黙の後、『アア、楽になったんですね』。その後会頭は『お機恵さんは、山室大佐に救われたのですよ。あの気性でどこで働いても決して良心の満足が出来ず、苦しんでおった時、救世軍に一身を投じて、今日まで幸福な生涯を送ったのですからね』。誠に夫人は世の常の幸福ではなく、御遺言にも残されたごとく、十字架の傍らに幸福を見出して感謝の一生を送られたのであります」。

矢島楯子の「楽になったんですね」のコメントは随所で引用されつとに有名だが、伝聞なので、矢島が執筆した「機恵子は精神上の後継者」という追悼文は、大事な資料である。

5. 「廓清」三女史訪問記を書いたのは機恵子

矢島楯子の「二婦人の伝記を手にして」という機恵子追悼文が掲載されたのは「婦人新報」1916

(大正5)年10月号で、機恵子に後藤夫人を紹介したのは「ちょうど3年前」とある。廓清の婦人記者が「矢島先生を訪う」を書いたのは1913(大正2)年1月号で時期も合致する。矢島楯子が機恵子に頼まれて紹介状を書いたのは、後藤男爵夫人であり、廓清の婦人記者が「夫の心を心とせらるる後藤男爵夫人」を書いた1913(大正2)年7月号とも合致する。ゆえに廓清の「矢島先生を訪う」と「夫の心を心とせらるる後藤男爵夫人」を書いた婦人記者は、機恵子であることが証明されることになる。

山室機恵子には日本の救世軍が経済的に自給すべきであるという信念があり、救世軍が軽蔑、嘲笑され、迫害を受けた時代から、近衛篤磨や大隈重信などを訪ね、救世軍の精神や事業を語り、後援者を得るために隠れた尽力をした。1912(明治45)年の機恵子の日記には体調がよくないのに毎日のように、何件も訪問していることが書かれている¹⁰⁾。

山室軍平は「彼女が私の妻になっていなかったならば、社会事業に相当の活動をしていた筈である。十分それだけの見識も力量も品性も備わっていた。しかし自らを無き者にし、人目につかぬ所に真実を尽くす事を心がけた。彼女は平生でできるだけ新聞記者と会見するのを避けた。新聞雑誌に彼女の話をした場合、よくよく面会を断り兼ねた時に限るのである。婦人救済や、凶作地子女救護や、結核療養所設立の為などに、公に立ち働いたことがある。しかし平生の志は、表だったことではなく、家庭の中に隠れ、夫を支え、健康を護り、後顧の憂いなく救いの戦場に馳駆せしむることにあつた」と述べている¹¹⁾。

機恵子がマスコミ関係者と会見するのを避けたというのも、後藤夫人の感化があつたのではないだろうか。後記するが、機恵子が他雑誌に文書を書いた時期も、大正元年までであり、後藤夫人の

姿勢に共鳴し、以後は取材を断つたとも言える。

ともかく機恵子の立ち位置は、従来型賢夫人の後藤男夫人と同様だが、一方で「婦人自ら起つの覚悟が必要」という進歩的な矢島楯子の影響も大きく受けていることがわかる。

矢島楯子と後藤男夫人訪問記は機恵子を書いた事が確実となったが、鳩山春子も機恵子を書いたと見てよいのではないだろうか。三者に共通することは、機恵子が始めた結核療養所設立資金募集の趣意書発起人に名を連ねていることである。もっとも後藤夫人に関しては後述するが、発起人として名を出すことは辞退している。

6. 婦人記者による他の「廓清」記事

三女史訪問記以外に「婦人記者」が「廓清」誌に書いた他の文章の内容を検討してみたい。

(1) 「芸娼妓口入所観察記」(明治44年)

婦人記者は芸娼妓、酌婦などの様子、お店の人々を観察している。「廓清会規則」第五条に「本会に調査部を設け左の事項を調査研究す(一)公娼に対する現代思想の研究(二)遊郭その他花柳界の調査」とあり、(二)には「醜業婦口入業者」が入っている。ゆえに「芸娼妓口入所観察記」は廓清会規約に則った活動といえる。しかも機恵子は発起人であり、前ページに婦人救済所での機恵子の写真も掲載されている。明治期に花柳界に乗り込み観察できる婦人といえ、機恵子であってもおかしくはない。

(2) 「売られたる娘」(明治44年)

「近所に駄菓子屋の娘がいた。人の悪口を言わず正直な子で近所の評判もよかつた。その後、私共は家長が役向きの都合で半年ばかり遠方へ行って帰つて来て見ると、娘の姿がなく苦界に身を沈

めたという。ある日、銭湯に騒がしく派手な芸者の一群がいて、駄菓子屋の娘もいた。あどけなさは失せ誇りがちに騒いでいて、失望と不快の念に堪えなかった」とある。山室一家は何度も引越したが、築地本願寺近くの家から、軍平が渡英する前に芝高輪の長屋に引越し、半年後に築地の借家に移っている¹²⁾。明治37年頃だが上記傍線部分と符号はする。ただし駄菓子屋の娘が関西弁なので、機恵子を書いたかは疑問が残る。

(3) 「恐るべき虚栄心の犠牲」(明治45年)

松山藩の軍人の妻が、万引きをして一家離散になった事件を紹介している。山室軍平は1911(明治44年)7月発行の婦女界に「虚栄心より起りし悲惨の実例」として「四国地方の陸軍中佐夫人の万引き」を書いている。新聞種になった事件とはいえ、山室軍平と「婦人記者」は同事件について書いている。機恵子は「虚栄心」を一番嫌悪した。

(4) 「嬰兒の育て方」「嬰兒の精神的育て方」 「主婦日常の心得」(大正2年)

これらが書かれた時期は、1913(大正2)年3月に四女善子を出産した機恵子にとって、まさに時機を得たテーマではある。機恵子が婦人会で講演した「習慣」¹³⁾と、同様の記載がある。機恵子の長女である民子が「寄生木の歌」に書いた機恵

子の思考、教育方針とも合致している。一例をとれば婦人記者は「自立心を養うため、自分の事は自分で始末させる」と書くが、民子は、母が幼い子どもに蒲団の上げ下げまでさせたと書いている。婦人記者は「木綿を着せる事、虚栄心、贅沢心を起す絹物など着せないように」と述べるが、民子は母から質素な木綿だけを与えられた少女時代の不満を回想している。婦人記者は「赤児の泣き声の判断」に「多年の実験によりて得たるもの」と書き、子だくさんだとわかる。

「廓清」には料理のページもあり、機恵子以外に婦人記者がいた可能性もある。ところが1914(大正3)年以後の「廓清」には婦人記者が登場しないばかりか家庭的なページも存在しない。例外は新刊書紹介欄だけである。「婦人記者」の登場は、機恵子が廓清会の評議員をしていた時期と重なり、この時期の婦人雑誌的な部分は、「廓清」全体に比べ違和感がある。廓清にふさわしくない家庭的な記事は、批判を受け取りやめになった可能性もある。

7. 雑誌寄稿は救世軍発展期と一致

「廓清」以外の雑誌で筆者が発掘した機恵子の署名入り文書は、現在のところ表3の通りである。

1907(明治40)年4月に救世軍創始者ウィリアム・ブース大将が来日し、約40日間、日本各

山室機恵子署名文書一覧(表3)

題	雑誌名	発行年月日
「学生諸姉に我が経験の片はしを告ぐ」	『婦人新報』第137号	1908(明治41)年10月25日
「悲惨は隣にあり」(上記とほぼ同内容)	『女鑑』第18年第11号	1908(明治41)年10月1日
「歳末の感想—救世軍の外に何者もなし」	『新家庭』第4巻第12号	1909(明治42)年9月2日
「逸れてしまった昔の友達」	『婦人くらぶ』第3巻第10号	1910(明治43)年10月1日
「救世軍と婦人」	『ムラサキ』第7巻第12号	1910(明治43)年12月
「臨月で猛火と戦った私の経験」	『新家庭』第3巻第3号	1911(明治44)年9月2日
「全く我れに克ちし時」	『新女界』第4巻第10号	1912(大正元)年10月1日
「大勢の子供の親たる傍ら外で働いた経験」	『婦女界』第13巻第1号	1916(大正5)年1月1日

地で演説教し、熱狂的歓迎を受けた。救世軍と山室軍平の力量は世に知れ渡り、軍平は書記長官に抜擢された。

山室軍平は大正15年に著した「救世軍略史」で、明治40年のブース来日以後を「創業の時代」に続く「発展の時代」と概観している¹⁴⁾。機恵子の雑誌寄稿は、表3の通り明治41年からで、まさに救世軍「発展の時代」に該当している。軍平の妻である機恵子にも講演依頼や取材が来るようになったのではなかろうか。

機恵子の署名記事の多くは、雑誌記者の取材による談話だと思われる。軍平が言ったように断り切れず載ったものであろう。しかし一次資料がほとんどない機恵子の肉声は、機恵子研究の手がかりとなるので、以下にほんの一部分のみを記すことにする。

(1) 「学生諸姉に我が経験の片はしを告ぐ」「悲惨は隣にあり」

「学生諸姉に我が経験の片はしを告ぐ」は機恵子の婦人新報例会での講演記録で、「青春時代に学窓から世の中を眺めた時は、楽しいように感じたが、実社会はまるで反対で悲惨と不幸がここに転がっているのです」で始まる。「悲惨は隣にあり」もほぼ同内容で「この世の悲惨や死は決して遠きにあらざる事を深く思います。墮落者、罪人と名付けられる人も決して私共より遠きにおる人ではないのです。貧困に育ち、教育なく宗教なく、親のためという優しい心から身を苦界に沈めたもの、貧ゆえに親子の情にほだされた盗みも少なくは御座いません。墮落者、大罪人も、皆その育ちと境遇によって造られたもので、かかる人を見ますごとにいい知らぬ惻隱の心が起こり、どうかして助けたいという同情心が心を燃やすので御座います」と、福祉の神髓をつかんだ文が続く。

(2) 「歳末の感想—救世軍の外に何ものもなし」

「私共は救世軍の事業本位で、すべて事業から割り出します。救世軍の方針として、窮民であっても故なく物を与えるのは弊害があって、独立心向上心を傷つけ、依頼心のみ増長し怠惰に流れしむるので、失業者なら、最初の間は保護を加え、衣食住の世話もしますが、相当の職業を与えて働いて食べるように(します)。婦人たちにも独立自活を奨励して(います)。失業者は労働寄宿舎に收容し、仕事が見つかったら寄宿舎から通勤させ(ます)。婦人の為には婦人ホームを設けました。歳末になると著しく失業者が増加しますので、救世軍の方針には反しますが、慰問籠を贈ることにしてあります。初めに貧困の程度を詳細に調べ、慰問籠を贈るべき境遇の者にのみ贈るのです。慰問籠の費用を得るために慈善鍋をして、寄附を仰いでおります。12月に入りますと、今年の慰問籠の成績はいかがであらうか、失業者はどんなに増加するかと、それのみを心配して居りますので、お正月に何を見物しようか、何を着せようかと、世間様でなさる歳末の考えをする余地はないのです。どうか今年もできるだけ多くの慰問籠を贈り、失業者の数を少なくしたい、これが私の希望で、それ以外には何もございません」。

(3) 「逸れてしまった昔の友達」

「山室があのように忙しい体でして、たくさんの子どもの世話をする暇に、諸方への手紙などを認めるようなことに日を送っています。こどもは末がようやく六ヶ月になり、少しの間も手放しできませんので、それをおぶったり抱いたりして書き物を致します」(傍点、筆者)。

この時期に機恵子が様々な執筆活動をしていることを証明している。そしてそれは廓清で「婦人記者」が執筆した時期と重なるのである。

(4) 「救世軍と婦人」

「私は家庭の任務のために、救世軍婦人部の活動には参加できないので、時々士官学校に説教の傍聴に参る位で御座います。ただ今、婦人部の事業としては、鷺見中校が主任者となって広尾に東京婦人救済会をやっております。山田中校が主任者たる大連の救済会は、内地から誘拐された婦人を救済しております。ただ精神上の救済だけならば何処の教会でもやっておりますから、救世軍では世の戦いに敗れ疲れて、精神的に死んだばかりでなく、肉体的にも困る人を救済して、肉体上の事は勿論お世話も出来るだけ致し、之を精神的に蘇生せしめようとするのでございます。救世軍が、生活難の為に起つ能わざる人々のために、親しい友達とするものでなければなるまいと存じます」と書かれている。

(5) 「臨月で猛火と戦った私の経験—お隣の焼けぬようにとばかり祈っていた」

1911（明治44）年1月23日に自宅が火事で全焼した経験談である。機恵子は臨月の身であったが、家財道具を取り出さず、ひたすら隣近所が焼けないようにと祈って類焼は免れた。記者による機恵子への聞き書きだが、「(二階の書齋は) 真っ赤です。四本の障子は今しもペラペラと、紅の舌を吐きだし炎はこちらに煽り返しています。この部屋には主人が多年丹精して貯めた書籍や説教の筋書きもあり、主人が十五の時から続けて書いた日記もあり、またブース大将と往復した書類やら、その他主人にとって得難い記念品の数々が御座いますので、私は思わず一步踏み込みかけましたけれど、駆け下り『申しわけありません、火事です』とお隣へ申して、家主と交番に宅の者を走らせました。いかに主人に取って大事な品があろうとも未練を残してぐずぐずしたなら、その間に近所が取り返しのつかぬ災難を被ることになる、何一つ

出さずとよい、と存じました」とある。

帰宅して自宅全焼を知った軍平は「創業当時の心になれという神様の思し召しであろう」と冷静に言うのだ。予期せぬ事態の時に、山室夫妻の人格の素晴らしさが際立つ。

(6) 「全く我れに克ちし時」

これは山室軍平が「山室機恵子」の著書で、多々引用した原文であることが判明した。機恵子の少女時代から、救世軍と出会い軍平と結婚するまでの自伝的文章である。山室軍平が引用しなかった部分は「父の代にはもはや物質的には疲弊しておりました」である。機恵子の長兄である佐藤臯蔵が、父について書いた「佐藤庄五郎略歴」（花巻市博物館所蔵）にも、「赤貧をもって一生を終わる」とあり、機恵子を裕福な家庭の出とする従来の見解は覆されるのである。機恵子が死のみぎわで「私が救世軍に投じた精神は、武士道をもって基督教を受け入れ、之をもって世に尽くすことにありました。位や金を求める生涯を送らなかった故、終迄満足を覚えます」¹⁵⁾ と言ったように、機恵子の一族は富に恬淡として「世に尽くす」使命感を持った人材が多いのである。これに関しては稿を改めたい。

8. なぜ結核療養所設立運動か

廓清会の評議員になり記事も書いていた機恵子が、廓清会から離れ、他雑誌への寄稿もやめ、結核療養所設立資金集めへと直進して行ったのは、なぜだろうか。

山室軍平は渡欧後の1909（明治42）年秋、胸を患い休養した¹⁶⁾。民子も、軍平が帰国後、高田医師に南湖院への入院を勧められたが、興津で三週間静養したと書いている¹⁷⁾。

しかし牧律が「機恵子は自分と家族を救済者の下に位置付け、徹底的に他者に与え尽くした」と

評した性格¹⁸⁾からして、夫の肺疾患は遠因にはなっても主要因ではあり得ない。

民子は「寄生木の歌」で以下の重要な証言をしていた。

「光子（三女）が三歳の冬、ジフテリアに罹ったので、座敷に隔離し、母が付ききりで看護していた。善子（四女）も風邪を引いて、幼い二人が耳鼻咽喉に故障を起こし、幾月間にわたり、母は毎日彼らを連れて病院通いをしなければならなかった。寒さの厳しい季節の二、三週間、母は二人の幼児と共に救世軍病院に入っていた。春になり子どもの健康がようやく恢復しかかると、母は自ら深く感ずる所があり、結核療養所創立の為に立つこととなった」¹⁹⁾。（傍点、筆者）

これを裏付けるように「ときのこえ」1912（大正元）年11月15日号には「チブスの疑いがあった山室大佐の幼嬢は快方に向かわれた」とあり、翌年2月1日号には「山室大佐令嬢光子は、先頃劇烈なるジフテリアに罹り、松田医学士等も大変心配せられたが、幸いにして快方に向かっておられる」とある。しかも翌月3月15日号には「山室大佐夫人は、3月3日にめでたく女子をあげられた」とある。

民子の書いた光子の年齢は数えなので、1911年3月生まれの光子が二歳の時にジフテリアに罹り、機恵子は妊婦の身で看病に明け暮れ、光子が快方に向かった頃、善子を出産した。その善子も風邪を引き、通院、入院もした。病院通いをし、救世軍診療所に入院したことも付き添うことで、機恵子は結核がいかに蔓延していて悲惨な状況にあるかを目の当たりにした。それが機恵子の結核療養所設立運動への起爆剤となったといえる。

一方で、廃娼運動は困難を極め、矯風会の

1918（大正7）年全国大会で、久布白落実は「法治国にあつて参政の権利がないのは、兵器なしでの戦争」と演説し、婦人参政権獲得を矯風会の主要目標の一つに決定した²⁰⁾。前述の「矢島楯子を訪う」で、主婦を一人一人訪問し同志を募った楯子ら先駆者の地道な努力が、婦人参政権運動へ繋がったといえる。

9. 療養所設立募金の発起人

(1) 救世軍病院

救世軍では1912（明治45）年6月、下谷に低所得者のための「救世軍病院」を開設し、夜間診療や巡回救護の先駆となった。二百坪の土地に病院、院長住宅、看護婦養成所を配置し、ベッドは十一床あるが、経済上の都合で当初は使っていない²¹⁾。

院長の松田医師は「救世軍貧民病院の近況」として「院長、医員二名、看護婦五名、事務員と使用人、皆、院内に住まい夜間診療、巡回救護もしている。病気は肺結核が多く、次が眼病（トラホーム）、花柳病で、診察の前に礼拝を行う」「浮浪者は二三日飯を食わずに居るので、まず飯を食べさせてから薬を飲ませる」「患者の自尊心を傷つけぬ為、極貧者以外の患者からは一銭でも薬価を徴収するが、五銭を超過する薬価の支払いに堪えうる患者は診療しない」と述べている²²⁾。

お金のない患者は診ないのではなく、窮民患者を救うための病院なので、支払い能力のある患者は他院に回すというのだ。山室軍平は「他の医師の所で一日十五銭払うべき患者が、救世軍病院に来て五銭ですまし、他の医師が迷惑する恐れ」にまで考慮している²³⁾。

巡回救護は「貧乏人を装って来る患者の心配もなく、病院に来る事もできない患者に手が届き」一年間で1,582時間巡回し、21,406戸を訪問し、1,997人の患者を診た。しかしここで一大欠陥を

発見したのは、結核患者の処置で結核療養所の必要性だった²⁴⁾。

「ときのこえ」には救世軍病院にきた母親が背中の子を降ろすと死んでいた例、真っ暗な長屋で死を待つだけの人々の例、葬式を出せず死んだ子を放置していた例などが紹介されている²⁵⁾が、機恵子はそれを目の当たりにしたことになる。

(2) 結核療養所設立計画

1912(大正元)年8月に救世軍創始者ブース大將が亡くなり、救世軍ではブース昇天記念事業として結核療養所の設立を計画した。当時、結核療養施設として南湖院があったが、中流以上の人を対象としていた。白十字会は診療所を設け、結核予防撲滅事業に先鞭をつけたが、他には日本結核予防協会、赤十字社結核予防会、済生会結核予防会がある程度だった²⁶⁾。

1913(大正2)年12月1日の「ときのこえ」には『救世軍療養所設立に賛助を仰ぐ状』に大隈重信、渋沢栄一、島田三郎、江原素六等が名を連ねている。

結核療養所の予算は10万円で150人収容予定であったが、第一次世界大戦も勃発し、思うように集まらず、機恵子は慨然として起ち設立資金を集める決心をした。

以下は機恵子の1914(大正3)年4月16日の日記である。内容もさることながら、機恵子の筆力のみごとさが表れているので、あえて現代文に直さずに地の文で列記する。

「病院の事業は己が責任なりと切に感じ、五、六、七月の三ヶ月に五万円の病院建設費を得んがために奔走せんと決心す。かかる立志は無謀の策なりと雖も、神においては能わざるなし。ジャンヌダークを起こしたる神、何ぞ今の世の必要に応じてこの身を使ひ給わざるべき。家庭の事情、健康の状態、己が能力。これらは皆、

この拳の成功を否定せしむ。さりながら我が弱き時に神の力最も強ければ、我はただ全力を捧げて早く百五十の結核患者と、その家庭の救済の実現せんまで働かんのみ。(略)嫁して後、ただ一枚の襦袢じゆばんの袖も、一つの襟も買ひし事なければ、外出に用いんものは皆汚れ、一つだに用いたゆるべきものなし。(略)立たんとすれば頭重く、歩けばすぐに疲る身をもって、かかる事業にとりかからんとす、無謀の極なり。されど一粒の種子もし地に落ちて死なば、多くの実を結ぶべし。愛する子等と家庭を楽しみ、嬉々として遊ばしめ度は山々にして、そを思う時、我は妻としての価値なきもの、母としての義務を果たさぬ者との苦しさ感じ胸間を圧すと雖も、今は進んで為さざる可からざるの時機、涙を飲んで最善の道に前進せんとす」²⁷⁾。

1914(大正3)年5月1日の「ときのこえ」には「山室大佐夫人は、このたび療養所建設計画のために、活動を開始せられた。多くの子女を有せらるる上、健康も優れておられる方ではないので、なかなか御骨折りのことであると思う」とある。民子14歳、武甫12歳、友子8歳、周平5歳、光子3歳、善子1歳と六人の子育て中で、機恵子の体調がよくないのは、周知の事実だったのである。

機恵子は親友の青柳春代に「山室はこのことにあまり賛成でない」ともらしていたと、青柳の娘、乗杉タツ子は証言している²⁸⁾。軍平が憂慮したのは当然である。

機恵子はまず千人の紳士名簿を作成し、一人から十円の寄附を集めたがなかなか進まず、次に婦人層に訴える決心をした。他国とは反対に日本の結核患者は男子より婦人に多いため、救世軍婦人後援会を組織し、療養所設立資金募集趣意書の発起人になってくれるよう訪問依頼した。趣意書には以下の文言が書かれている。

「近時我が国における結核病の蔓延は真に驚くべきものがあり、惨状を極めております。毎年、結核による死亡者数は、日露戦争による戦死者数にも匹敵するそうです。コレラ、ペストなどの伝染病には救護施設もありますが、結核病には救療設備を欠き、貧困な患者は罹患すれば死を待つほかになく、伝染して一家全滅になる悲惨な事例は枚挙にいとまがありません。(略)救世軍では貧困なる結核患者のために、療養所を設立しようと大隈氏や渋沢氏等の御発起で寄付金を募集中です。英国から3万円寄附されましたが、別に7万円を募集し合計10万円を用いて、少なくとも百乃至百五十人の結核患者を収容する設備をなさんと苦心しつつあります」²⁹⁾。

津田梅子は速やかに賛同したばかりでなく、救世軍療養所婦人後援会事務所の場も提供して協力をした。募金方法は一口五円で幾口でも賛助願うということである。機恵子は徒歩と人力車で一件一件訪問したのである。

機恵子は9月3日付けで津田梅子に発起人確定者のリストを送付している。「ただ今までに確定の分は津田先生、瓜生男夫人、山本夫人、山脇房子氏、鳩山春子氏、青山夫人、木下夫人、矢島楫子氏、徳富夫人、井深夫人、河井道子氏、丹羽しげ子氏、今西夫人、柳谷千代子氏、櫻田節彌氏、宮川すみ子氏、嘉悦孝子氏、以上17名確定。明日中に御確定被下候分 尾崎夫人、小崎千代子氏、海老名夫人、鶴澤夫人、三輪田真佐子氏」と記した中に、「後藤男夫人 出来るだけ尽力すれば名はやめてとのお返事なるも、ご再考を願ひ置きせうらう」と加えている。婦人記者の「後藤男夫人を訪う」に書かれた後藤夫人の思想が如実に表れている箇所である。にもかかわらず機恵子が「ご再考」をお願いしているのは、リーダー的婦人の協力支援が運動に欠かせない事を熟知しているか

らであろう。

1914(大正3)年9月に刷り上がった趣意書には、井深花子、今西イト子、鳩山春子、新渡戸マリ子、丹羽しげ子、本多貞子、徳富静子、尾崎エイ子、河井道子、嘉悦孝子、津田梅子、瓜生シゲ子、野口幽香子、矢島楫子、山本多穂子、山脇房子、安井哲子、小崎千代子、青山高子、安藤ふみ子、櫻田節彌子、木下泰子、三輪田真佐子、三宅タツ子、宮川スミ子、平野濱子、元田悌子の27名の発起人名が記載されているが、後藤男夫人の名はないので、後藤夫人の意志は変わらなかつたといえる³⁰⁾。

しかし、1914(大正3)年11月1日の「ときこのえ」に「救世軍療養所婦人後援会」発起人名が載っているが、後藤男爵夫人の名前もあり28名になっている。同じ号に「山室大佐夫人が少し前から病床に居られる。夏の盛りに療養所建設の運動に奔走したのが触ったのではあるまいか」との記事も出ている。後藤夫人の名前が手違いで載ったのは、機恵子が病床にいて十分照合できなかったせいであろうか。矢島楫子が後藤夫人を紹介したのは1913(大正2)年なので、機恵子はそれ以後も後藤夫人に何度か面会したことになる。

10. 機恵子最期の寄稿文

1916(大正5)年1月の「婦女界」に機恵子が書いた「大勢の子供の親たる傍ら外で働いた経験」は、絶筆ともいえる。概要は以下の通りである。

◎家庭に出来た失敗

夫婦ともに救世軍の軍人として働かねばならないのですが、大勢の子供の母となってみますと家庭の仕事も多く、手回りがねることばかりで困っております。こんな不行届な家庭ですから、一年間を顧みましても失敗の思い出ばかりが多いのです。

救世軍では細民の結核病者を救済する結核専門の慈善病院を設けることとなり、敷地も中野に求め、大葬殿の用材をも御下賜にあずかっており、

今少しの基金を募集すればすぐに病院が出来ることになっております。それでどなたでも一番お嫌いになる寄付金の勧誘の役を私が引き受けて、毎日奔走することを一昨年から始めました。

ところが私の性質として極端まで熱中しなければ気がすまないため、家庭の事にも手落ちが多く、殊に子供に対して誠にすまないことをしたと後悔いたしました。

二人の女中に子供の世話と家事を任せて毎日のように朝早く出て夕方遅くまで家を空けましたところ、だんだんと子供の様子が変わってまいりました。女中の好みによって、ある子はひどく可愛がられるがある子は反対に疎まれ、悲観的な性質になる傾きがございます。五歳になる子供がそうなり非常に心配しているうちに、私も過労のために三ヶ月ほど療養することとなり、自分の病気の手当をする傍ら、偏屈になった子供の性質を矯正するために苦心しました。他の子供達より手厚く愛し、女中も替えて子供の周囲を一新するように努め、案じたよりも早くなおすことが出来喜んでおります。

◎感謝の過去と希望の将来

このような始末で家庭も寄付金募集もはかばかしく参りませんでした。幸いにも世間の篤い同情により、徐々に好成绩をあげており遠からず病院の設立を見ることが出来るであろうと存じております。今年こそは事業の進歩を計りたいと覚悟しております。家をあけることがあっても、今度こそは悔いを繰り返さないよう十分に注意したいと存じております。

(略) 御大典の砌に表彰された三人の社会事業家に、主人も加えられておりました。もとより神と人との間に立って御用を勤める私共では、世俗的な名譽などを望むのでは御座いませんが、二十年余の長い間、世の誤解を受けていた救世軍の真価が天聴にも達し、ひいては世間一般の誤解をと

くことができれば困難な事業も幾分か為しよくなるであろうと、楽しき将来の事業に望みを抱く次第でございます。(傍点、筆者)

「寄附金の勧誘は誰でも一番嫌う役」だからこそ機恵子が引き受けたと書かれている。最後部分は重要だが、稿を改めたい。

11. おわりに

機恵子は救世軍発展の時代に該当する明治41年頃から様々な雑誌に寄稿し、明治44年の廓清会発足以後は、「廓清」誌婦人記者もしたが、大正3年からは結核療養所設立運動に没頭したといえる。1916(大正5)年2月11日発行の「ときのこえ」は結核特集をし、一部5銭で10万部発行し、純益を療養所建設に回した。そこには「結核で死亡する者は年に13万3千人、一日約360人以上、4分間に一人死亡している。日本で結核に罹患している人は約130万人、総人口に比較すれば50人に一人が結核患者になる」とある。

結核療養所は杉並区和田に最初の計画を縮小し、50名を収容することで工事が行われ1916(大正5)年11月23日に開所した。この時、国庫から一万余円の補助があった。結核予防法が制定されたのは、三年後の1919年である。1920年には結核患者を入院させる東京市立療養所(後の国立中野療養所)が開設したが、その先駆であった³¹⁾。

しかし機恵子は病に倒れ、大正5年7月4日に第8子を出産したが7月12日に逝去し、完成した療養所をみることはできなかった。

結婚する時、両親に「50歳まで着られる地味な着物を作って下さい。救世軍で着物をこさえるつもりはありませんから」と頼んだ機恵子だが、50歳どころか、わずか41歳で力尽きてしまったのである。

註

- 1) 山室武甫「山室軍平にふさわしき妻 機恵子」玉川大学出版部 49頁
- 2) 「醜業婦救済所報告」(明治34年6月1日)、「婦人救済所近況」(同11月1日)、「婦人救済彙報」(同11月15日)、「婦人救済所報告」(明治35年2月15日)、「故近衛公爵を悼む」(明治37年1月15日)
- 3) 久布白落実「廃娼ひとすじ」中公文庫 127頁
- 4) 「廓清」第1巻第2号 廓清会
- 5) 山室軍平「山室軍平選集第9巻」209頁
- 6) 久布白落実「廃娼ひとすじ」中公文庫 128頁
- 7) 守屋東「山室軍平選集 追憶集」73～74頁
- 8) 久布白落実「山室軍平選集 追憶集」225頁
- 9) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」423頁
- 10) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」377頁
- 11) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」404頁
- 12) 山室民子「寄生木の歌」日刊基督教新聞 山室民子研究者の牧律が救世軍資料館で見つけた資料。牧律「山室機恵子の結婚」「キリスト教史学」第65集 2011年参照。
- 13) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」372頁
- 14) 「救世軍略史」大正15年 近代日本キリスト教名著選集 (15)
- 15) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」440頁
- 16) 三吉明「山室軍平」吉川弘文館 201頁
- 17) 山室民子「寄生木の歌 (64)」日刊基督教新聞
- 18) 牧律「山室機恵子の結婚」キリスト教史学学会 2011年
- 19) 山室民子「寄生木の歌 (90)」日刊基督教新聞
- 20) 久布白落実「廃娼ひとすじ」中公文庫 131頁
- 21) 「ときのこえ」救世軍 明治45年7月1日
- 22) 松田三彌「霊肉の病院」「新家庭」(第4巻第8号 明治45年) 26頁
- 23) 「ときのこえ」救世軍 明治45年7月15日
- 24) 「ときのこえ」救世軍 大正3年1月1日
- 25) 「ときのこえ」救世軍 大正2年5月1日
- 26) 山室武甫「山室軍平にふさわしき妻 機恵子」玉川大学出版部 149頁
- 27) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」391頁
- 28) 乗杉タツ子「民衆の友 山室軍平回想集」284頁
- 29) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」399頁
- 30) 山室軍平「山室軍平選集第8巻 山室機恵子」397頁～401頁
- 31) 三吉明「キリスト者 社会福祉事業の足跡」金子書房 170頁

主要参考文献

- 山室軍平 (1916) 「山室機恵子」 「山室軍平選集 第8巻」 日本図書センター
- 山室軍平 (1926) 「救世軍略史」 「近代日本キリスト教名著選集 15」
- 山室武甫 (1965) 「山室軍平」 玉川大学出版部
- 山室軍平 (1984) 「私の青年時代」 救世軍出版部
- 山室軍平 (1969) 「平民の福音」 救世軍出版部
- 山室武甫 (1965) 「山室軍平にふさわしき妻 機恵子」 玉川大学出版部
- 山室武甫 (1965) 「山室軍平回想集」 山室軍平記念会
- 三吉明 (1986) 「山室軍平」 吉川弘文館
- 高道基 (1973) 「山室軍平」 日本基督教団出版部
- 吉屋信子 (1965) 「ときの声」 筑摩書房
- 山室民子 (1936～1937) 「寄生木の歌」 日刊基督教新聞
- 久布白落実 (1982) 「廃娼ひとすじ」 中央公論社
- 太田愛人 (2000) 「簡素に生きる」 信濃毎日新聞社
- 太田愛人 (2005) 「天に宝を積んだ人びと」 キリスト新

聞社

牧律 (2010) 「回顧録『寄生木の歌』から探る山室民子

の葛藤」キリスト教社会福祉学研究第 42 号

「廓清」復刻版 廓清会 (1911 ～)

「ときのこえ」不二出版 復刻版 日本救世軍 (1987 ～)

「婦人新報」復刻版 日本基督教婦人矯風会 (1986 ～)

「女学雑誌」臨川書店 復刻版 女学雑誌社 (1984 ～)

[明治・大正期雑誌]

「女鑑」「新家庭」「ムラサキ」「新女界」「婦女界」「婦
人くらぶ」